

■ 書 評 ■

《精神科臨床エキスパート》 誤診症例から学ぶ 認知症とその他の疾患の鑑別

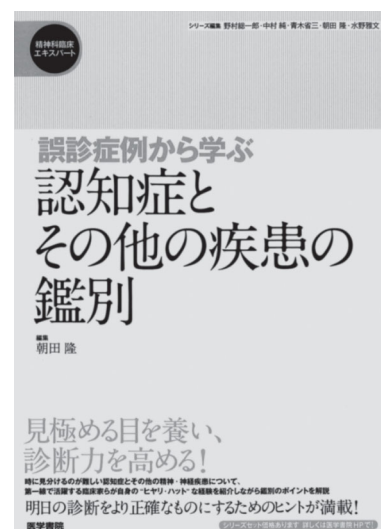
朝田 隆●編
野村総一郎，中村 純，青木省三，
朝田 隆，水野雅文●シリーズ編集

佐賀大学教授・精神医学 門司 晃

まず「誤診症例から学ぶ」というタイトルが刺激のかつ魅力的である。編者の序文にも紹介されているが、北海道大学名誉教授である山下格先生の『誤診のおこるとき——早まった了解を中心として』という名著も過去にあり、評者は多くをこの著作から学ばせていただいた。やはり、「とくに失敗からこそ、人は多くを学ぶものである」というのが素直な現場感覚と思われる。

本書の内容を紹介すると、まずは編者が執筆した第1部「総論」では誤診の原因とその分類が取り上げられている。臨床診断を誤る6パターンとして、未知による失敗、無知による失敗、不注意による失敗、手順の不遵守による失敗、誤判断による失敗、調査・検討の不足による失敗が挙げられ、おのおのに対応する具体的な誤診パターンが紹介されている。続いて、ベッドサイドでもすぐに役に立つ認知症診察のポイントが簡潔かつ明瞭に述べられている。最後に「診断で失敗しないための習慣作り」という項が設けられている。具体的内容は本書をぜひご覧になっていたきたいが、まさに編者の臨床家としての深い知恵が開陳されている。

第2部「各論」ではうつ病、遅発性パラフレニー・双極性障害・統合失調症、心気症・不安障害、てんかんなどの各疾患と認知症との関係について9章に分けて複数の誤診例を取り上げている。各論のそれぞれの章は第一線の専門臨床医によって書かれている。各論全体では46の誤診例が紹介され、症例報告とその解説、そのあとに正しい診断に至るための勘所、関連する重要事項の提示というスタイルをとっている。目次にもおのおのの症例についての簡潔な紹介文が記されているので、読者はそれに基づいて、興味を引く頁を開くことができるようになっている。この点は日頃多忙な臨床医にとって極めて親切な配慮と思われる。なぜ誤診が起きたのかのポイントは青字で所々に強調されているが、「疾患を一元的にみるか、二元的にみるかは、診断学では重要な点である」「医師は、診断をするうえで決定的と思えるほどに重要な病歴や検査結果があると、他の診断の可能性について無意識のうちに排除しようとする傾向がないとはいえない」といったすべての臨床家にとっての金言が紹介されている。総論・



各論を通じて、随所に参考文献が提示されている。いくつかの項の紹介文献を実際にあたってみたが、読者がさらに知見を深めるうえで有用と思われる重要な文献が新旧を問わず選ばれていた。

評者は前任の大学病院および現在勤務の大学病院において、認知症疾患医療センターの設立に加わった経験を持つが、どちらの大学でも神経内科と精神科が連携して、認知症を診る形式をとっている。この形式は認知症のような神経内科学と精神医学のいわば「ニッチ」に存在する疾患診療には極めて理想的と考えるが、どこでもこのような形式が存在するわけではない。これからますます必要性が増大する認知症診療に精神科医が適切に対処するために、ぜひ本書を精読されることをお勧めしたい。

B5 頁200 2013年
定価6,090円
(本体5,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01793-0]

医学書院刊